

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：13401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：25870270

研究課題名(和文) 中堅期の教師における危機の克服過程の調査研究：授業研究での省察の形態との関連

研究課題名(英文) The process of middle-age teachers' solving the crisis: The mechanism of the type of reflection in lesson studies in their schools

研究代表者

岸野 麻衣 (Kishino, Mai)

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門(教員養成・院)・准教授

研究者番号：80452126

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、成長の危機におかれうる中堅期の教師が、授業の再構築と校内での役割変化という課題をいかに克服するのかを明らかにした。先行研究から、学校で行われる授業研究における実践の省察が重要とされているが、綿密な検討は不十分である。そこで本研究では、学校の授業研究で生じる省察の形態として、他者の実践を介した省察、他者の目を介した省察、過去の自己を介した省察、という3つに分け、これらが中堅期の教師の授業の再構築と校内での役割変化、教師としてのアイデンティティの再構成にどのように関連するのかを検討した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify how middle-age teachers solved the crisis about reconstruction of lessons and about change of role in school. Previous studies suggested that reflection about practices in lesson studies was important, but the mechanism was not examined sufficiently. Thus, this study examined three types of reflection, (1) reflection through observation of the other teachers' lesson, (2) reflection through other teachers' observation, and (3) reflection through previous self. It was suggested that the type of reflection influenced reconstruction of teachers' identity through the teachers' solving the crisis about reconstruction of lessons and change of role in school.

研究分野：社会科学・教育学・教師教育学

キーワード：教師教育 中堅教師 省察 授業研究 学習観 校内研究 役割変化

1. 研究開始当初の背景

教師は、初任から中堅、熟練へと変容し成長していく(秋田, 1997)。初任期には情熱を持って子どもと関わりながら指導技術を身につけていき、中堅期には一定の力量を持つようになる一方で授業のマンネリ化と校内での役割変化が課題となる。成長の危機に陥った教師は、表面上は授業を進められても子どもの学習を活性化できなかつたり、校内で中核的な役割にあっても形骸化していたりし、これを打開するためには授業を見直して再構築すること、校内で真に中核となることが必要となる。本研究ではこの中堅期の成長の危機を教師がいかに克服するかに着目する。

中堅期の危機の克服においては「省察」が重要といえ、教師は過去の実践を振り返って改善していくと同時に、実践の中で行為しながら振り返って修正し、専門性を高めていく(Schön, 1982)。しかし一人での省察は独りよがりになる問題も孕む。危機の克服には他者との関わりを通じた省察により自己の実践を相対化することが必要になるといえる。

他者との関わりを通じた省察を促すため、先行研究では、学校で行われている授業研究が重要であることが明らかにされ(坂本, 2007)、子どもたちが学び合う「学びの共同体」を目指して教師たち自身も学び合うコミュニティを形成していく実践例が多く示されている(たとえば佐藤, 2006)。申請者もまた、ある小学校において、授業研究を核として教師集団に学び合うコミュニティが形成される過程について事例研究を行ってきた(岸野, 2012)。

しかしこれらの先行研究には次の3つの問題が挙げられる。第1に、初任期の教師に比べ、ある程度授業での指導力が身につけていると見なされがちな中堅期の教師については注目されにくく、学校での授業研究と中堅期の危機との関連には焦点が当てられていない。第2に、理念や実践例の提示にとどまり、学校での授業研究の中でどのような省察が起きるのか、メカニズムが十分に実証されていない。第3に、授業研究では教師の中に多様なレベルの省察が生じている可能性が高いがその検討も不十分である。授業研究においてどのような省察が起き、それが教師の成長にどのように結びつくのか、より綿密な検討が必要である。

そこで本研究では、学校での授業研究で教師に生じる省察を3つの形態として捉える。第1は、他者の実践を介した実践の省察である。他の教師の授業を参観することで、良い部分を習うと同時に、他者に照らして自分の実践を見直し、改善していく。第2は、他者の目を介した実践の省察である。自分の授業を他の教師に参観してもらい、議論をすることで、他者の目から自分の実践を相対化して批判的に吟味し、見直していく。第3は、過去の自分を介した省察である。授業研究を重

ねていくことで、自分のこれまでのあり方そのものを問い直し、アイデンティティを再構成していく。このように授業研究での省察を3つの形態として捉えることで綿密な検討が可能となり、中堅期の教師の授業の再構築や校内での役割変化にどのように結びつくのか、メカニズムを実証的に明らかにすることが可能となる。それにより、教師の成長を支える授業研究の進め方の開発に役立つことが期待できる。

2. 研究の目的

本研究は学校における授業研究で生じる3つの形態の省察がそれぞれ中堅期の教師にとって授業の再構築や校内での役割変化にどのように結びつき危機を克服させるのかを、3つの観点から3年にわたり、明らかにする。

第1に〔研究1〕として、学校での授業研究で生じる第1の形態の省察(他者の実践を介した自己の省察)・第2の形態の省察(他者の目を介した自己の省察)が、中堅期の教師の課題の一つである授業の再構築にどのように結びつくのかを検討する。

第2に〔研究2〕として、学校での授業研究で生じる第1の形態の省察(他者の実践を介した自己の省察)・第2の形態の省察(他者の目を介した自己の省察)が、中堅期の教師の課題の一つである校内で中核となっていく役割変化にどのように結びつくのかを検討する。他者の実践や他者の目を介して省察していく中堅教師のあり方と、他の教師との相互作用や関係性の関連について分析を行い、中堅教師の2つの省察のあり方が学校で中核的な役割を果たすことにつながる過程を明らかにする。

第3に〔研究3〕として、学校における授業研究で生じる第3の省察の形態(昔の自己を介した自己の省察)が教師としてのアイデンティティの再構成にどのように関連するかを検討する。これまでの授業研究を通して過去の自分を見直すことで、授業や校内での役割をどのように捉え直し、アイデンティティを再構成しているかを明らかにする。

3. 研究の方法

〔研究1〕では学校の授業研究で中堅期の教師に生じる2つの形態の省察(他者の実践を介した省察・他者の目を介した省察)と授業の再構築との関連を明らかにするため、4つの小学校と1つの教育行政機関に在籍する5名の中堅教師を対象とした。いずれも教職歴10年以上の教師で、校内や地域で授業研究の中核となっている教師であった。各学校での授業研究会に参加し、授業場面や授業後の協議場面について、ビデオや筆記による記録を行い、対象教師に聞き取りを行った。対象教師が実践を振り返って記録化した報告も分析対象とした。なお対象教師には、収集した授業記録や教師の報告への考察をフ

ードバックし、やり取りしながら研究を進め、データ解釈にも活用した。

〔研究2〕では2つの形態の省察（他者の実践を介した省察・他者の目を介した省察）と校内での役割変化との関連を明らかにするため、4つの小学校に在籍する4名の中堅教師を対象とした。いずれも教職歴10年以上の教師で、校内で授業研究の中核となっている教師であった。各学校での授業研究会に参加し、授業場面や授業後の協議場面について、ビデオや筆記による記録を行い、対象教師に聞き取りを行った。対象教師が実践を振り返って記録化した報告も分析対象とした。なお対象教師には、収集した授業記録や教師の報告への考察をフィードバックし、やり取りしながら研究を進め、データ解釈にも活用した。

〔研究3〕では第3の省察の形態（昔の自己を介した省察）と教師としてのアイデンティティの再構成との関連を明らかにするため、4つの小学校と2つの教育行政機関のいずれかに所属していた10名の中堅教師を対象とした。いずれも教職歴10年以上の教師で、校内で授業研究の中核となっている教師であった。本研究では主に、対象教師がそれぞれに実践を振り返って記録としてまとめた実践報告を分析対象とした。同時に、各教師の学校においては、校内の授業研究会に参加し、授業場面や授業後の協議場面について、ビデオや筆記による記録を行い、対象教師に聞き取りを行ってきたことから、これらのプロセスで得られたデータも解釈に用いた。

4. 研究成果

（1）学校での授業研究で生じる第1の形態の省察（他者の実践を介した自己の省察）・第2の形態の省察（他者の目を介した自己の省察）と授業の再構築との関連〔研究1〕

対象教師それぞれについて、授業を省察する中で生じた授業の捉え方の変化と授業の変化の点で分析を行った。その結果、授業の再構築にあたって、第1の省察が大きな働きを持つ教師と、第2の省察が大きな働きを持つ教師とに分かれた。

前者については、他者の授業を見たときに子どもの学習過程に目を向け、実践の価値や意味を見いだすことが可能になり、自身の授業づくりにもそれが活かされていた。たとえば、ある教師は、「1時間の授業を分単位で徹底管理し次々と明確な指示のもと活動中心の学習が展開されている授業」を見たとき、かつての自分ならば「的確に子どもを動かさねらい通り指導してよい」と評価したであろうが、今は「活動で管理する教え込みの授業」でむしろ課題の大きい授業と捉えたという。ここでこの教師は「子どもをどう動かすかという『活動』ではなく子どもが何をどう考えようとしているかという『思考』」を捉える必要性に言及した。その背景では、この教師は自身の教育観の変遷を「教える」か

ら「伝える」「支える」へ、そして「支え合う」へと変化したという。このような教師としての学びを捉え返しがあり、熟達者からの知識・技能の伝達という学習モデルから、学習者の主体的な思考・判断・表現による学習へという、学習観の大きな転換があったといえる。

後者については、自分の授業について参観者と様々にやり取りすることで、子どもの思考過程に目を向け、授業のあり方を見直すことに結びついていた。たとえば、ある教師は、参観者から得た授業記録の検討を通して「普段何気なく接している子どもとのやり取りの中に、子どもの学びを壊している自分がいることに気づかされた。そして学びは教師ではなく子ども同士のものでなければならないと再認識させられた」という。このように子どもの学びを大事にする視点を再確認することにより、単元構成や授業案の組み立てにおいても、子どもにとっての意味をより考えるようになり、単に知識を教えるのではなく、子どもと共に授業を作っていくことようになっていた。

（2）学校での授業研究で生じる第1の形態の省察（他者の実践を介した自己の省察）・第2の形態の省察（他者の目を介した自己の省察）と校内での役割変化との関連〔研究2〕

それぞれの教師について、校内で中核となっていく役割変化としてどのような変化が見られたか、記録をもとに歩みを辿り、分析を行った。その結果、立場によって大きく2つに分けられた。

第1は研究主任という立場で、周囲を引っ張るリーダーから共に学ぶ場をコーディネートし支えるリーダーへという変化が見られた。それは、自分の実践を他者に見てもらって自身の授業を見直し学習観を変革しつつ、他者の実践を見合いながら協働で作っていく場を支援していく中で起きていた。たとえば、ある教師は、自分の授業を見てもらって教育観を見直した経験から、「子どもの学びから見えてきたもの」をまとめて語り合う校内研究会を企画したという。そこでさまざまな態度の教師とやり取りすることを経て、自身の振る舞いを振り返りながら、校内で共有のビジョンを形成したり、個々の教師が自ら学んでいこうとする風土を醸成したりするために、コーディネートの工夫を重ねていったという。

第2は、研究主任を支える立場で、ただの一教員としての認識から、組織を意識し、他の先生たちとの間に立って調整を試みる動きへという変化が見られた。それは自分の実践を他者に見てもらって授業を見直し理想の授業を模索しながら、実践を見合ったり協働で実践を行ったりする校内研究の場に参画する中で起きていた。たとえば、ある教師は、自分自身の授業について試行錯誤しつつも、生徒指導主事という校内での役割や

市の10経年研修のための公開授業など、「ミドルリーダー」としての役割を意識し、子どもたちや同僚との探究をコーディネートする意識を持つようになったという。

(3) 第3の省察の形態(昔の自己を介した省察)と教師としてのアイデンティティの再構成との関連〔研究3〕

データを元に、授業研究を通して省察してきたことを振り返って過去の自分を見直すと、今では授業の在り方や校内での役割をどのように捉え直しているのか、分析した。特に、過去の授業研究での出来事や自己の振る舞いがどのように意味づけられているのかを検討し、教師としてのアイデンティティがどのように再構成されているのかに焦点を当てた。その結果、3つの在り方が見られた。

第1に、いろいろな授業や保育を見て、その捉え方を転換していき、それぞれの学校や園の授業や保育を支えていく立場として、過去の自分には見えていなかったことが見えるようになったものと捉えられていた。これは特に、教育行政機関で指導主事として勤める教師に見られ、自身の学習観の大きな転換が、自分の携わる研修の再構築につながり、地域の教師たちの実践と専門性の向上をいかに支えていくのかというアイデンティティの再構成へ結びついていた。

第2に、研究主任の立場で校内研究を支えながら、あるいは研究主任を支える立場となりながら、それぞれが取り組んできた教科や分野の実践を統合的に捉え直し、これからの学校教育を担っていくものと捉えられていた。これらの教師は、それぞれ中心に取り組んできた教科等での実践を見直しながら、校内研究の進め方や学校組織の中での協働の在り方についても目を向けるようになっていった。たとえばある教師は、「語り合い聴き合いながらチームとして同じ方向を向いていく学校」を求めるようになっていた。長期的に先を見据えながら、今は自分ができることに取り組んでいくというアイデンティティの再構成がなされていたといえる。

第3に、これまで経験した失敗や挫折、戸惑い等のつまずきを捉え直しながら、学習観を転換していきつつ、今の立場でできることに取り組み、かつての自己を超えていこうとするものと捉えられていた。これは特に異動後の教師に見られ、新しく赴任した学校の文化や実践に最初は戸惑いやつまずきを示しながら、新境地を見出し出ていく姿が見られた。たとえば、ある教師は、外国語活動に力を入れて実践してきたが異動先でうまくいかず、つらい状況に追い込まれながらも、外国語での学びに限定せず「言葉を育て」「心を育て」る実践に向けて取り組み、学年協働での授業づくりへ展開していった。このように、かつての自己を超えて新たに挑戦し他者と共に学び続けていこうとするというようにアイデンティティが再構成されていた。

(4) 総括的考察

ここまで述べてきたように、中堅教師にとって、授業の再構成という危機に関しては、他者の授業を見たり、自分の授業を他者に見てもらったりする中で子どもの学習過程や思考過程に目を向け、学習観の転換が起きることで解決されていた。また校内での役割変化に関しては、授業の再構成と連動して、自身の学び方の転換にもつながり、それを校内でコーディネートしていくよう変化していた。過去の自己の在り方を省察することは、これらのプロセスを自覚することに結び付き、自分の変容を踏まえてそれぞれの立場で自分にできることを認識し、教師としてのアイデンティティを再構成していた。

これらの教師の危機克服の過程には、教師の学習を支える仕組みが重要であるといえ、現職教員が学ぶ全国の教職大学院の在り方や研究者が学校や教師を支える在り方を再考する手がかりになることも示唆された。また今後の課題として、このように変容を遂げた教師たちが指導主事や学校管理職となっていく際に、教育委員会の研修や学校マネジメントとどのように結びついていくのか、さらに検討していく必要がある。さらに、本研究の主な対象は小学校教師であったが中学校以降や幼児教育の現場等、他の学校種での教師についても検討していく必要があるといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

岸野麻衣, 小学校における「問題」とされがちな子どもの学習を支える授業の構造: 協同での学習過程における認知的道具の使用をめぐる事例分析, 質的心理学研究(質的心理学会), 査読あり, 2016, 15号, 65-81

岸野麻衣, 園の枠を越えた実践記録による園内リーダー・幼児教育アドバイザーに育成を図る研修: 福井県幼児教育支援センターにおける研修のデザインと調整過程の実践事例分析, 教師教育研究(福井大学教職大学院), 査読なし, 2016, 9号, 37-46

岸野麻衣, 学校での協働研究と教師の専門性の向上を支える実践コミュニティにおける力量形成, 教師教育研究(福井大学教職大学院), 査読なし, 8号, 2015, 19-24

〔学会発表〕(計12件)

岸野麻衣, 遊びがつながり展開していく保育の構造: 活動の質が繰り上がる保育のデザイン, 日本発達心理学会第27回大会(於広島大学), ポスター発表, 2017年3月

岸野麻衣, 園の枠を越えた実践記録の検

討による幼児教育研修のあり方：福井県
幼児教育支援センターにおける研修のデ
ザインと調整過程，日本教育心理学会第
58 回大会（於香川大学），ポスター発表，
2016 年 10 月

岸野麻衣，実践のおもしろさを実践の記
述を通して検討するために，日本教育心
理学会第 58 回大会（於香川大学）準備委
員会企画チュートリアルセミナー「教師
のための教育心理学研究入門」（企画：大
久保智生，講師：小塩真司，岸野麻衣，
篠ヶ谷圭太）講演，2016 年 10 月

岸野麻衣，教職大学院と保育現場での実
践研究にかかわっている立場から，日本
質的心理学会第 13 回大会（於名古屋市
立大学）自主シンポジウム「子どもとむ
かいあう 教育実践の記述，省察，対話」
（企画・司会：川島大輔，企画・話題提
供：勝浦真仁，話題提供：熊田広樹，大
倉得史，指定討論：菅野幸恵，岸野麻衣）
指定討論，2016 年 9 月

Mai KISHINO, Teacher Development in
Community Constellations. Annual
meeting of World Association of Lesson
Studies in England, Paper presentation
2016 年 9 月

岸野麻衣，幼稚園の遊び場面における「み
んな」の形成：4 歳児クラスの参与観察
から，日本発達心理学会第 26 回大会（於
北海道大学），ポスター発表，2016 年 3
月

岸野麻衣，「実践共同体」としての保育や
授業を見合う研究会の場の構成：対話に
おける相違性と方向性の出現を規定する
制約と関係性，日本質的心理学会第 12 回
大会（於宮城教育大学），ポスター発表，
2015 年 10 月

岸野麻衣，学校での実践研究を機軸にし
た協働探究アプローチの可能性，日本教
育心理学会第 57 回大会（於新潟大学），
大会準備委員会企画シンポジウム「実践
から学び，実践に還す 教育実践と歩む
教授・学習研究の展望」（企画・司会：
一柳智紀，話題提供者：橘春菜，岸野麻
衣，伊藤崇，指定討論：高垣マユミ，鹿
毛雅治），シンポジスト，2015 年 8 月

岸野麻衣，リフレクションの時間性・協
働性・重層性，日本教育心理学会第 57 回
大会（於新潟大学），自主シンポジウム「授
業改善とリフレクション 教師として
成長すること(1)」（企画，司会，話題
提供：遠山孝司，話題提供：岸野麻衣，
林なおみ，藤澤伸介，指定討論：高橋知
己，浅田匡），シンポジスト，2015 年 8
月

岸野麻衣，小学校教師の学習者としての
アイデンティティの変容過程，日本発達
心理学会第 25 回大会（於東京大学），ポ
スター発表 2015 年 3 月

岸野麻衣，教師は実践からいかにして学

ぶのか：自他の実践の省察が授業の変革
に結びつく過程，日本教育心理学会第 56
回大会（於神戸国際会議場），ポスター発
表，2014 年 11 月

Mai KISHINO, The structure of lesson
that helped child to learn: A case
study of support to the child with
developmental disorders, Forth
Congress of International Society for
Cultural and Activity theory Research
in Sydney, Poster presentation 2014
年 9 月

〔その他〕（計 2 件）

一柳智紀・橘 春菜・岸野麻衣・伊藤
崇・高垣マユミ・鹿毛雅治，実践から学
び，実践に還す：教育実践と歩む教授・
学習研究の展望，教育心理学年報（日本
教育心理学会），2016. 55 号，267-272

岸野麻衣，授業の変容に連動する長期
的・重層的省察を促す協働的コミュニテ
ィ：福井大学教職大学院における分散型
コミュニティの連動，大阪教育大学スク
ールリーダーフォーラム，実践報告，2015
年 11 月

6. 研究組織

研究代表者

岸野 麻衣 (KISHINO Mai)

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部
門（教員養成・院）・准教授

研究者番号：8 0 4 5 0 4 9 3